

スポーツ研究センター

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

スポーツ研究センターは、2021年度大学評価委員会の評価結果への対応、研究活動という点では非常に良好な成果を示し、また、コロナウイルス下で不十分であった年度目標の達成状況についても、2022年度中に改善して課題を解決しようという姿勢が明示しており、大変評価できる。また、2022年度以降は、スポーツ支援活動を教職員にも拡大させるという野心的な目標も持っており、今年度以降、当該目標を具現化していき実施することが期待される。その一方で、研究センター内における研究支援、事務作業の補助に関しては不十分な状況であると言わざるを得ない。これは研究所の予算の問題もあるので難しい問題であるが、長期的には科研費などの一時的な資金に頼ることなく、継続的な資金をもとにして事務スタッフを配置して対応することが望ましい。そのためにも、研究所が示してきた高い研究力、外部への発信力を内部にも周知してアピールすることが期待される。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

総評として「大変評価できる」とのコメントを頂いたが、「不十分な状況」と指摘があった「研究支援、事務作業の補助」については、予算面が制限要因となり現状では解決方法が見出せない状況にある。本センターの運営は、事務局である保健体育センター多摩体育課の職員、専任研究員の尽力によって行われているが、活動内容や外部との共同作業などを利用しつつ、予算執行や作業労力を有効に活用していく予定である。具体的には、従来実施してきた公開講座は本センターが実施する必然性のある内容のみに限定して開催する、関連した内容を研究している大学院生に調査・測定等を依頼することを検討している。このうち、後者の大学院生への調査・研究の依頼は、2024年度から運用予定の「本学大学院博士後期課程修了者・満期退学者への研究支援を目的とした研究員制度」によって博士課程修了生を受け入れて、研究活動を促進することにも繋がると考えており、全学を通じたスポーツ・体育関連の研究センターとしての責務の一端を担い得ると考えている。

また、本センター所員の研究活動による知見は、論文や学外での公演・指導活動を通じて広く発信することができている。さらに、昨年度から検討を始めている教職員を対象とした職域における健康支援活動などについても、関連部局との合同での検討を継続しており、今年度も引き続き実現に向けて作業を進展させて行く予定である。

II 自己点検・評価

1 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

1.1①研究所(センター)において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
1.1②上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績(開催日・テーマ・参加人数等)について記入してください。	
本センター所属の所員における研究活動の促進・活性化を目的として、年間を通じてセンター所属所員が実施した5つの研究プロジェクトの支援を行った。これらのプロジェクトの報告会(2023年3月2日・16名参加)を行い、所員間の研究活動の周知・促進を促した。また、社会貢献に関しては、長崎県のスポーツ協会と提携し、各所員の専門とする研究分野からの助言や研修などを実施することとなった。この活動については、従来の本学体育会サポートと同様に、所員が組織的に関与する体制を整えた。	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

2.1①研究所（センター）として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学 スポーツ研究センター 研究倫理要綱	

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等） ※2022年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。
<p>【スポーツ研究センター内】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体育会運動部におけるハイパフォーマンス統括システムの構築 ・ 学生アスリートの競技不安とレジリエンスの関係の解明 ・ 在校生の大学への帰属意識に与える大学スポーツに対する評価の影響 ・ 体育会所属学生に対する測定データのフィードバックシステムの開発 ・ 本学学生の初年次における体格・体力について（体力測定プロジェクト） <p>上記、5プロジェクトを実施。報告会をオンラインで実施し（次年度継続となるプロジェクトは次年度に報告予定）、運営委員にプロジェクト内容と研究結果を共有した。</p> <p>【対外的活動】</p> <p>（公開講座）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 育成年代におけるフィジカルデータ取得とサッカー教室 2023年1月21日、近隣の小学生80名程度が参加。 <p>（講習会講師）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>中澤史</u>. PASMI 主催 Charity event for Ukraine において「伸びる選手と伸び悩む選手のマインドセットの違い」について講義した（2022年4月9日、オンライン開催）。 ・ <u>中澤史</u>. PASMI 主催第2回 Charity event for Ukraine において「伸びる選手と伸び悩む選手のマインドセットの違い」について講義した（2022年4月20日、オンライン開催）。 ・ <u>中澤史</u>. ralosso 主催ウクライナ支援チャリティイベントにおいて「スポーツメンタル講座」と題した講義を実施した（2022年6月18日、オンライン開催）。 ・ <u>中澤史</u>. 公益社団法人日本ボート協会主催公認コーチ3養成「ボート専門科目」講習会において「スポーツ心理学」に関する講義を実施した（2022年10月9日、戸田公園管理事務所）。 ・ <u>山田快</u>. 令和4年度日本スポーツ協会公認コーチ3養成講習会、2022年8月5—7日および9月3, 4, 10日, TKP ガーデンシティ竹橋（東京都）およびオンライン, 令和4年度共通科目Ⅲ集合講習会, ブロックおよび全国大会レベルのプレーヤー・チームに競技力向上を目的としたコーチングを行う者を対象として, 目的のコーチングを実践する上で必要な資質能力の研鑽を行った。 ・ <u>越部清美</u>. 障害者のためのレクリエーション支援者養成研修会、2023年2月11日、全国障害者福祉センター（東京都）、テーマ「まるごとの身体そのもの」がアートになる！～より楽しく個性を引き出す表現活動～、内容：オンラインでの表現活動の可能性について、全国の障害者のレクリエーション支援を担う方々を対象とした研修会。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

(講演)

- ・ 山田快. 令和4年度第1回静岡県スポーツ指導者研修会, 2022年12月10日, グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター:静岡県), プレーヤーとコーチがもつニーズのギャップを探る, 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者を主な対象として, スポーツ指導者としての実践力を高め, 指導者間のネットワークづくりを支援した。
- ・ 山田快. 令和4年度“アスリートの卵”育成者資質向上研修会, 2023年1月19日, 静岡県スポーツ協会(オンライン), そのコーチングにキャリアは考慮されているか, スポーツに携わるアントラージュを対象として, 特にジュニア期における選手育成体制強化のための指導者, スポーツの導入期にあたる幼児期から児童期における運動指導を行う指導人材の養成を行った。
- ・ 山田快. 令和4年度第2回静岡県スポーツ指導者研修会, 2023年2月5日, グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター:静岡県), プレーヤーズセンターの原点に立ち返る, 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者を主な対象として, スポーツ指導者としての実践力を高め, 指導者間のネットワークづくりを支援した。
- ・ 永木耕介. “Bhutan Jita-kyoei cup”, Preliminary lecture 2023.2.18 ブータン国・柔道協会から招待

(プロジェクト)

- ・ 越部清美. 多様性を育むアートプロジェクトを実施する. 2022年10月1日・2日・15日・16日・29日・11月12日・26日、法政大学多摩キャンパス総合体育館空手場、テーマ「出会い」、内容：障がいのある人、ない人、いろいろな人たちとかかわり、身体表現の楽しさや喜びを学びあう。

3.1②対外的に発表した研究成果(出版物、論文、学会発表等)

※2022年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者(当研究所関係者は下線付記)、内容等)、論文(著者(当研究所関係者は下線付記)、タイトル等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者(当研究所関係者は下線付記)、内容等)の詳細を簡条書きで記入。

【論文】

- ・ 荒井弘和・樋口匡貴・伊藤拓・中村菜々子 東京2020大会の開催直後における大会開催に対する東京都民の認知 スポーツ産業学研究, 32, 251-255.
- ・ 堀本菜美・荒井弘和 選手が考える運動部活動指導者に対する信頼と依存 応用心理学研究, 48, 112-113.
- ・ 武部匡也・栗林千聡・荒井弘和・飯田麻紗子・上田紗津貴・竹森啓子・佐藤寛 大学生アスリートにおける摂食障害の有病率推定 日本摂食障害学会雑誌, 2, 1-11.
- ・ 樋口匡貴・荒井弘和・伊藤拓・中村菜々子 東京都在住者における新型コロナウイルス感染症の予防行動およびその関連要因の変遷—第1回緊急事態宣言および第2回緊急事態宣言期間中を中心とした検討— Journal of Health Psychology Research, 35, 71-81.
- ・ 中澤史・岡田誠・小野田桂子・佐藤彩乃・堀七瀬「女子新体操選手の競技不安とレジリエンスに関する検討」法政大学スポーツ研究センター紀要41, 19-24, 2023年3月31日発刊.
- ・ 山田快・堀本菜美・長谷川賢典. アスリートにとって優れたコーチの特徴. スポーツ心理学研究 49 (2) 157-168.
- ・ Shimizu Y, Tsuji K, Ochi E, Okubo R, Kuchiba A, Shimazu T, Tatematsu N, Sakurai N, Iwata H, Matsuoka YJ. Oncology care providers' awareness and practice related to physical activity promotion for breast cancer survivors and barriers and facilitators to such promotion: a nationwide cross-sectional web-based survey. Support Care Cancer. 2022 Apr;30(4):3105-3118. doi:

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- 10.1007/s00520-021-06706-8. Epub 2021 Dec 1. PMID: 34853914 Free PMC article.
- Tsuji K, Matsuoka YJ, Kuchiba A, Suto A, Ochi E. Accuracy of exercise-based tests for estimating cardiorespiratory fitness and muscle strength in early-stage breast cancer survivors in Japan. *Support Care Cancer*. 2022 May;30(5):3857-3863. doi: 10.1007/s00520-022-06811-2. Epub 2022 Jan 17. PMID: 35037120
 - Tsuchiya Y, Morishima T, Ochi E. Slow-Speed Low-Intensity but Not Normal-Speed High-Intensity Resistance Exercise Maintains Endothelial Function. *Res Q Exerc Sport*. 2022 Apr 21:1-8. doi: 10.1080/02701367.2021.2022586. Online ahead of print. PMID: 35446201
 - Morishima T, Iemitsu M, Fujie S, Ochi E. Prior beetroot juice ingestion offsets endothelial dysfunction following prolonged sitting. *J Appl Physiol* (1985). 2022 Jul 1;133(1):69-74. doi: 10.1152/jappphysiol.00200.2022. Epub 2022 Jun 2. PMID: 35652829 Clinical Trial.
 - Morishima T, Ochi E. Effect of combined aerobic and resistance exercise on serum Klotho secretion in healthy young men -a pilot study. *Curr Res Physiol*. 2022 Jun 11;5:246-250. doi: 10.1016/j.crphys.2022.06.001. eCollection 2022. PMID: 35756695 Free PMC article.
 - Eftestøl E, Ochi E, Juvkam IS, Hansson KA, Gundersen K. A juvenile climbing exercise establishes a muscle memory boosting the effects of exercise in adult rats. *Acta Physiol (Oxf)*. 2022 Nov;236(3):e13879. doi: 10.1111/apha.13879. Epub 2022 Sep 20. PMID: 36017589
 - Tsuchiya Y, Yanagimoto K, Sunagawa N, Ueda H, Tsuji K, Ochi E. Omega-3 fatty acids enhance the beneficial effect of BCAA supplementation on muscle function following eccentric contractions. *J Int Soc Sports Nutr*. 2022 Sep 8;19(1):565-579. doi: 10.1080/15502783.2022.2117994. eCollection 2022. PMID: 36105122 Free PMC article. Clinical Trial.
 - Ueda H, Saegusa R, Tsuchiya Y, Ochi E. Pedal cadence does not affect muscle damage to eccentric cycling performed at similar mechanical work. *Front Physiol*. 2023 Mar 10;14:1140359. doi: 10.3389/fphys.2023.1140359. eCollection 2023. PMID: 36969610 Free PMC article
 - 泉重樹・梅下新介・小松泰喜・荒牧勇・石橋勇・佐藤義裕・相澤徹・小山田裕二. ボクシング選手の外傷・障害に対する質問紙調査 一男女選手間の検討一. *日本臨床スポーツ医学会誌*. 31(1), 153-161, 2023
 - 花田早希・泉重樹・川島光貴・秋山智紀. 大学男子ラクロス選手における筋力と競技レベルの関連. *日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌*. 2022;29(8):16-21.
 - 泉重樹・春日井有輝・瀬戸宏明・川島光貴・秋山智紀. 法政大学スポーツ健康学部アスレティックトレーニングルーム活動報告 第6報 : 新型コロナウイルス感染状況下の活動 : 法政大学におけるアスレティックトレーナー活動 10. *法政大学スポーツ健康学研究*. 13, 15-21, 2022
 - Wakatabe, S. and Hayashi, Y. The influence of internally focus of attention during vigorous-intensity aerobic exercise for improving health status. *法政大学スポーツ研究センター紀要* 41, 37-43 (2023)
 - 小島翼・林容市・高見京太. 本邦陸上競技の中・長距離種目の競技者におけるテーパリング期間のトレーニングに関する研究. *法政大学スポーツ研究センター紀要* 41, 45-57 (2023)

【書籍】

- ・伊藤マモル（監修）、最新版・基礎から学ぶスポーツトレーニング理論、日本文芸社、2023年1月
- ・伊藤マモル（監修）、4. 背中のゆがみ防止に、バンザイ療活、光文社女性自身編集部、2023年、1月
- ・柳川洗輔、伊藤マモル オンライン授業 と対面授業に対応 した体力測定結果の比較、法政大学スポーツ研究センター紀要、41、63-69、2023年3月
- ・荒井弘和・清水智弘 スポーツとライフスキル 応用心理学ハンドブック編集委員会（編） 応用心理学ハンドブック 福村出版 Pp.800-801.
- ・小山貴之 編集:アスレティックケア-リハビリテーションとコンディショニング. ナップ. 第2版. 東京. 2023 (分担:泉重樹. マッサージの実際. 215-222)

【学会発表】

- ・荒井弘和・深町花子・榎本恭介. 現代の大学生アスリートはどのような価値を持っているのか. 日本スポーツ心理学会第49回大会（2022年9月30日～10月2日）新潟県，朱鷺メッセ.
- ・岡田誠・中澤史 アスリートのスポーツ傷害発生要因とパーソナリティ・情動知能の関係，日本スポーツ心理学会第49回大会（2022年9月30日～10月2日）新潟県，朱鷺メッセ.
- ・中澤史・岡田誠 レジリエンスと自我状態の関係，日本スポーツ心理学会第49回大会（2022年9月30日～10月2日）新潟県，朱鷺メッセ.
- ・岡田誠・中澤史 スポーツ傷害発生要因と情動知能の関係，九州スポーツ心理学会第36回大会（2023年3月4日～3月5日）久留米大学
- ・Ochi E. Slow-Speed Low-Intensity but Not Normal-Speed High-Intensity Resistance Exercise Maintains Endothelial Function. ACSM's 2022 Annual Meeting (2022年6月)
- ・越智英輔. エイコサペンタエン酸高含有魚油と分岐鎖アミノ酸の併用摂取がもたらす筋損傷への効果」第76回日本栄養・食糧学会（2022年6月）
- ・Ochi E. Association between CKMrs8111989 polymorphism and muscle damage after maximal eccentric exercise. 27th Annual Congress of the European College of Sport Science（2022年9月）
- ・越智英輔. ウェアラブル端末による身体活動のセルフモニタリングが乳がんサバイバーの身体活動量に及ぼす影響. 第77回日本体力医学会大会（2022年9月）
- ・越智英輔. 伸張性運動後の筋機能および血清クレアチンキナーゼの応答は、筋力および性差の影響を受けるのか. 第77回日本体力医学会大会（2022年9月）
- ・越智英輔. 在宅による高強度・短時間・間欠的運動トレーニングが最高酸素摂取量に及ぼす影響に関するシステムティックレビュー・メタアナリシス. 第77回日本体力医学会大会（2022年9月）
- ・越智英輔. ピーク成長率時の歴年齢予測モデルの妥当性検証 -小城成長研究に基づいた日本人データを活用-. 第33回日本成長学会学術集会（優秀演題賞受賞）（2022年11月）
- ・永木耕介. オリンピック柔道採用をめぐる嘉納治五郎の思想（2）—イギリス Budokwai, 主に“G.Koizumi”の柔道観から—. 日本スポーツ人類学会第24回大会（2023年3月16日）
- ・川島光貴・泉重樹・平野裕一, 犬走渚: 反応課題の有無とスティック・ボールの保持が大学女子ラクロス選手のカッティング動作中における下肢キネマティクスに及ぼす影響. 日本アスレティックトレーニング学会誌. 8, 01-11, 2022
- ・古賀武揚・泉重樹・瀬戸宏明. Velocity based training に基づいたスクワットトレーニングがRFD向上に及ぼす影響～PBTとの比較～. 日本アスレティックトレーニング学会誌. 8, 01-06, 2022

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ・若田部舜・小畠翼・本田真澄・菅谷亮介・林容市．サイクリング運動中の注意の方向が運動に伴うきつさと脚部筋活動に及ぼす影響．第77回日本体力医学会大会（2022年9月20-22日）
- ・小畠翼・林容市・高見京太．全国中学校駅伝大会までのトレーニング強度分布に関する縦断研究．第35回ランニング学会大会（2023年3月4-5日）

【その他】

(出版物)

- ・中澤史．成功の秘けつは「楽しさ」にあり．月刊バレーボール，76(5)，92-93，2022年4月15日発刊．
- ・中澤史．成功のキーワードは楽しさとやりがい．月刊バレーボール，76(6)，82-83，2022年5月13日発刊．
- ・中澤史．「不満を解消すれば選手のやる気は高まるのか？」．月刊バレーボール，76(7)，100-101，2022年6月15日発刊．
- ・中澤史．「伸びる選手と伸び悩む選手」．月刊バレーボール，76(8)，80-81，2022年7月15日発刊．
- ・中澤史．選手とのつながりを意識した指導法．月刊バレーボール，76(9)，96-97，2022年8月12日発刊．
- ・中澤史．集団心理．月刊バレーボール，76(10)，120-121，2022年9月15日発刊． 中澤史
- ・中澤史．メッセージの伝え方．月刊バレーボール，76(11)，116-117，2022年10月15日発刊． 中澤史
- ・中澤史．チームの風通しは良好ですか？．月刊バレーボール，76(13)，116-117，2022年11月15日発刊．
- ・中澤史．実力発揮に役立つフロー理論．月刊バレーボール，77(1)，88-89，2022年12月15日発刊．
- ・中澤史．人とかかわることは得意ですか？．月刊バレーボール，77(2)，88-89，2023年1月19日発刊．
- ・中澤史．あがりの防止法．月刊バレーボール，77(3)，94-95．2023年2月15日発刊．
- ・中澤史．なぜ出る杭は打たれるのか？．月刊バレーボール，77(4)，62-63．2023年3月15日発刊．
- ・伊藤雅充・土屋裕睦ほか・山田快．実践！グッドコーチング レベルアップ編．(PHP研究所)，2022年10月11日
- ・平野裕一．野球の打撃に対する認識と最近の打撃研究の成果．Sportsmedicine、34(8):38-41，2022．

(報告書)

- ・越部清美．コロナ禍における障がい者レクリエーションの発想転換と新たなプログラムの開発 報告書、2020年度新型コロナウイルスに関する調査研究助成 助成事業、2022年9月、全国障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）、公益財団法人太陽生命厚生財団

3.1③研究成果に対する社会的評価（招待講演、書評・論文の引用等）

研究所（センター）の活動に対して2022年度に得たと考える社会的評価（招待講演等）を記入してください。招待講演が学会発表の場合も重複してこちらに記入してください。※注

※2022年度に引用された論文

泉重樹：引用件数4件林容市：引用件数8件

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

(招待講演)

- ・ 山田快、福岡県小学生バレーボール連盟創立 40 周年記念式典、福岡県中小企業振興センター(福岡県)、実践！グッドコーチング〔レベルアップ編〕～ハラスメントなくプレーヤーの成長を支援するために～、執筆を手がけた出版物を基にスポーツ指導の現場で高潔なコーチングを実践するための知見を提供した。(2022 年 10 月 8 日)
- ・ 越智英輔、第 38 回水産油脂技術懇話会 「n-3 系多価不飽和脂肪酸が運動パフォーマンスに及ぼす効果」 (2022 年 6 月)
- ・ 越智英輔、慶應義塾大学 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン [ライフステージ別がんリハビリテーション習得コース] 「Exercise Oncology の可能性」(2022 年 12 月)
- ・ 越智英輔、静岡県スポーツ協会令和 4 年度競技力向上対策事業 ジュニアアスリート指導者資質向上・アスリートの卵育成者資質向上研修会「育成年代の生理学的特徴とトレーニング」(2023 年 2 月)
- ・ 越智英輔、港区立がん在宅緩和ケア支援センターういケア(慈恵医大)「乳がん治療後の運動～自宅で実施できるエクササイズ～」(2023 年 3 月)

3.1④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2022 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

昨年度、外部評価に関する論議を行い、今年度から他大学に設置されている同様の研究センターに外部評価を依頼することが決定している。本年度予算においても、外部評価用の予算を計上し、現在依頼先を検討している。

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況

※2022 年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金及び 2022 年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者(代表・分担の別)、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を簡条書きで記入。

応募状況

- ・ 運動部活動による選手の人格形成および心理社会的スキル向上のプロセスの解明 基礎研究(C)(研究代表者) 中澤史、(研究分担者) 吉田康伸
- ・ 交流分析理論に依拠したアスリートの心理支援プログラムの開発 基盤研究(C)(研究代表者) 中澤史、(研究分担者) 吉田康伸
- ・ アスリートの主体性を重んずるコーチングの精査 基盤研究(C)(研究代表者) 山田快
- ・ スポーツ実施促進に対するリモートワークおよび金銭的インセンティブの効果 基盤研究(C)(研究代表者) 杉本龍勇
- ・ サッカー選手におけるゲームおよびフィジカルデータが選手の価値に与える影響について 基盤研究(C)(研究代表者) 井上尊寛

獲得状況

- ・ アスリートの価値観はコミュニティの価値観とどのように共存するのか? 令和 4—6 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(研究代表者) 荒井弘和、(研究分担者) 山田快
- ・ コロナ禍における東京都民の行動記録: 予防行動と関連要因のパネル調査 令和 4—6 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(研究分担者) 荒井弘和
- ・ トップアスリートの心理的能力を向上する新たなメンタルトレーニングプログラムの開発 令和 3—5 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(研究分担者) 荒井弘和
- ・ オメガ 3 系脂肪酸摂取による骨格筋可塑性の分子機構の解明とサルコペニア予防への応用 令和 5—8 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(研究代表者) 越智英輔
- ・ アプリを活用した在宅の高強度インターバルトレーニングが乳がんサバイバーの倦怠

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>感に与える影響:多施設共同ランダム化比較試験 日本医療研究開発機構 健康・医療情報活用技術開発課題 (研究代表者) <u>越智英輔</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サルコペニアに伴う骨格筋の質的变化:メカニズムと有効な対策 令和元—4 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) (研究分担者) <u>越智英輔</u> ・低負荷スロートレーニングによる血管内皮機能および骨格筋の適応メカニズムの解明 令和 3—5 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究分担者) <u>越智英輔</u> ・心理学的アプローチを生かした運動介入が乳がんサバイバーのがん再発不安に与える影響 令和 2—4 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究分担者) <u>越智英輔</u> ・隠された? 嘉納治五郎の柔道思想—オリンピックの柔道採用をめぐる戦前と戦後の変化— 令和 2—4 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究代表者) <u>永木耕介</u> ・新型コロナウイルス感染症による地域健康格差の解析 令和 4—6 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究分担者) <u>街勝憲</u> ・身体動作・運動の調整力発達を促進しうる身体活動推奨年代および実践内容の解明 令和 4—6 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究分担者) <u>林容市</u>

※注 社会的評価に該当するその他の例として、研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対する 2022 年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や 2022 年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等も含む。研究所(センター)に該当するものがない場合は、研究所に所属している所員によるものを含めることも可、その場合は研究所の研究領域に關係する論文や刊行物等とする。社会的評価の対象となるものが論文や刊行物等である場合、それらが公表された時期については問わない。また、実績等は把握できている範囲で記入。

III 2022 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動	
中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした包括的な研究プロジェクトを起ち上げる。また、所属所員の研究の知見を有機的に繋げ、より広く周知することを目的としたシンポジウムや研究会等を開催する。	
年度目標	運営委員会でテーマを設定した上で、所員や研究員、客員所員等によるシンポジウムや研究会の開催について、具体的な実施内容を検討して方向性を定める。	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・本センター所員の研究内容を踏まえたシンポジウムや研究会の開催に向けた人選を完了する。 ・シンポジウムや研究会のテーマや開催時期、方法などに関する検討を実施する。 	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	企画しているシンポジウムや研究会について、実施のテーマや具体的な内容などについては検討を進めた。しかし、センター予算の執行については今年単年度で用途を変更しにくい状況にあり、また、新型コロナウイルス感染拡大予防を踏まえて実施可能な方法や規模などが不透明であり、実施の時期、人選などは決定するに至らなかった。
改善策	全ての所員がセンターの専任でないため、学内業務に対する労力を念頭に置いた上で、センターの研究活動に対する貢献度を把握した上で活動していくことが重要であると考えている。次年度以降、各所員に対して個別の調査や意向確認をした上で、目標達成に向けた計画を策定する予定である。	
評価基準	社会連携・社会貢献	
中期目標	近隣地域居住者を対象として現在まで継続している公開講座に加え、関連部局と連携して教職員を対象とした職域におけるスポーツや身体活動	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	の促進、健康づくりへ貢献できる活動を進展する。また強化のための指導・支援を行う体育会の対象部を増やし、法政スポーツの活性化に貢献する。	
年度目標	教職員を対象とした職域における身体活動量増大や健康づくりを目的に、関連部局との協議や実態調査を踏まえて実施内容を検討し、活動に向けた準備を行う。	
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・学内の関連部局との協議および状況確認のための教職員への調査を実施する。 ・体育会の各部に対して、本センター所員による強化に向けた指導・支援の要望を把握する。 	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価 B	
	理由	教職員対象の職域における健康づくりについて、学内の関連部局と複数回の面談を実施し、教職員の健康状況における情報収集や具体的にセンターが協力可能な活動について相談した。しかし、健康診断や特定保健指導との関係・協同について不明瞭な状況にあり、教職員への調査実施には至らなかった。他方、体育会各部への指導・支援は拡充されており、今後の充実も期待される。
	改善策	教職員の健康づくりに向けた活動は、関連部局と協力しながら次年度も継続して貢献できる内容を模索していく予定である。今年度の面談で、ある程度の方向性が定まっているため、次年度は具体的な活動を実践したい。また、2022年度は都道府県レベルの競技団体との協定も締結されたこともあり、従来の体育活動支援に加えて学外への社会活動・社会連携も充実させたい。
<p>【重点目標】</p> <p>教職員を対象とした職域における身体活動量増大や健康づくりを目的に、関連部局との協議や実態調査を踏まえて実施内容を検討し、活動に向けた準備を行う。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内の関連部局との協議を行い、本センターの貢献可能な内容・事業を明確化する。さらに、状況確認を目的に、本センターの活動内容に対する教職員の関心等について調査を実施する。 		
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>年度冒頭に設定した目標については、今年度の活動によってその達成にいくつかクリアしなくてはならない段階が存在することが明らかになり、結果として年度末までに達成することができなかった。これは、目標設定時の状況把握が不十分であったことが主たる原因ではあるが、今年度の充実した検討によって、いくつかの課題や実施可能な活動内容については明確化することができた。特に、重点目標としていた教職員を対象とした職域における健康づくりについては、関連部局との協同で実施に向けて具体的に調査を進めており、次年度以降の発展が期待される。また、従来の体育会活動のサポートについても、新たな専任研究員の着任により充実が期待される。これに関連し、今年度締結された長崎県スポーツ協会との協定を契機に、学外における活動の充実を図る基盤ができた。そのため、従来の体育会活動への支援に加え、各所員の有する専門性を活かした学外での研究・指導の充実を進めて行く予定である。なお、今年度の研究活動における年度目標にも上げていたシンポジウムについては、国内における新型コロナウイルスの感染拡大予防対策がおおよそ定まった段階で、改めて実施に向けて方法や規模を決定し、次年度に開催することを予定している。</p>		

IV 2023年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
------	------

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした包括的な研究プロジェクトを起ち上げる。また、所属所員の研究の知見を有機的に繋げ、より広く周知することを目的としたシンポジウムや研究会等を開催する。
年度目標	各所員間の連携を深め、共同研究や共同での研究費獲得を促進する。それらの成果を踏まえ、シンポジウムや研究会等を通じて知見を報告する準備を行う。
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・本センター所員が共同で行う研究を推奨し、研究プロジェクトとして支援する。 ・本センター所員が共同で行った研究成果を報告する場を検討し、開催に向けた準備を行う。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	近隣地域居住者を対象として現在まで継続している公開講座に加え、関連部局と連携して教職員を対象とした職域におけるスポーツや身体活動の促進、健康づくりへ貢献できる活動を進展する。また強化のための指導・支援を行う体育会の対象部を増やし、法政スポーツの活性化に貢献する。
年度目標	教職員を対象とした職域における健康づくりを目的に、関連制度について調査を行い、実施の可能性や実施内容を検討し、具体的な活動内容を定める。 また、本センター所員の法政スポーツに対する貢献度を高め、強化支援を行う体育会の対象部数を増やす。
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・職域の健康づくりに向けて、センターの活動が学内における各種制度の充実に貢献しうる観点を調査する。 ・体育会の各部からの本センター所員に対する指導・支援の要望を把握し、具体的な支援活動事例を増大する。
<p>【重点目標】 職域における健康づくりに貢献するために、学内の関連部局との協議、関連制度の調査を行った上、教職員を対象とした支援活動の可能性を検討する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 学内の関連部局との協議を行い、関連する制度を確認した上で、本センターの活動が貢献しうる内容を明確化する。この結果を踏まえて少人数を対象にトライアルを実施し、要した労力や人員数、感想などを確認した上で、実際に支援活動が可能な対象者数、事業内容の規模を検討する。</p>	

【大学評価総評】

昨年度の自己点検において、2022年度大学評価委員会の評価結果では年度目標の達成状況について基本的に高く評価されており、年度毎の自己点検作業が確実に成果を挙げていることが確認できる。また同委員会から改善すべきとの指摘があった研究センター内における研究支援などの不十分性については、一定の予算制限はあるものの、事務職員、専任研究員による運営の効率化などにより、真摯な改善努力が認められる。具体的には大学院生による調査・測定等を依頼することなど、現実的な改善努力が検討されており、評価できる。研究活動についても、センター研究員の多くが積極的に研究成果を学内外に発表し、あわせて学外での公演・指導活動などを通じて、全学を通じたスポーツ・体育関連の研究センターとしての責務を担いする体制を構築するための努力も認められ、評価できる。

また、中期目標・年度達成目標において、研究活動の面では、個別研究のみならず、包括的な研究プロジェクト（共同研究）の模索など、より高い目標達成計画の策定が表明されており、期待される。社会貢献活動においても、教職員の健康作り、学内外での体育活動支援について積極的な取り組みが表明されており、同様にその成果が期待される。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023 年度自己点検・評価シートに記載された II 自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を 確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた
<法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。